令和５年度第１回奈良市アートプロジェクト実行委員会　会議録

開催日時	令和５年８月 18 日（金）16 時から 17 時まで	
開催場所	奈良市役所 中央棟５階 秘書広報課 応接室（キャンベラの間）	
次第	1　開会 2　委員長挨拶 3　議事 （1）令和４年度決算 （2）令和５年度事業計画（案）について （3）令和５年度事業予算（案）について 4　閉会	
出席者	委員	仲川委員長、佐々木副委員長、青木委員、萩原委員、北谷委員【計５人出席】
	ディレクター	小山田徹氏（ならまちワンダリング プログラムディレクター、グリーン・マウンテン・カレッジ校長）
	事務局	谷田事務局長（奈良市市民部長）、池田事務局次長（奈良市市民部次長）、 森事務長（奈良市文化振興課長）、吉川、奥村、一柳、守道、桑理 （事務局・文化振興課）
開催形態	公開（傍聴人　２人）	
決定事項	●全議案について　承認された。	
担当課	奈良市アートプロジェクト実行委員会事務局（市民部文化振興課）	

議事の内容
1　開会 2　委員長挨拶 3　議事 (1)第１号議案　令和４年度決算報告について （事務局より説明） ・予算 10,200 千円のところ支出は 10,058 千円。差額 144,238 円については奈良市へ返納。会計処理について、4 月 19 日に監事の青木幸子氏による監査を実施。適正処理を確認。 ⇒承認。 (2)第２号議案　令和５年度事業計画（案）について (3)第３号議案　令和５年度事業予算（案）について （事務局より説明） 令和５年度事業計画（案） ・第２号議案令和５年度事業計画について、令和５年３月 24 日開催の、令和４年度第２回奈良市アートプロジェクト実行委員会において意見のあった令和５年度事業計画（案）についてさらに内容を精査した。

・令和３年度より「演劇」と「美術」を交互にメインとなるプロジェクトを実施しており本年度は「演劇」。事業の幅を広げるため演劇を含めた「パフォーミングアーツ」をテーマとする。
・また現在改修工事を行っている、ならまちセンターの拠点機能の強化につながる事業を「アートハブプログラム」として開催。

（プログラムディレクター 小山田徹氏より説明）
「アートハブ・プログラム」ならまちワンダリング
・ワンダリングとは、彷徨（さまよ）うという意味。人の脳は、様々な経験知や感覚を混濁させながら世界を認知していくが、その脳の働き方のことをワンダリングと呼ぶ。断片、感覚が混濁しながら定着していくというのは学び合いとかぶるイメージがある。
・アートとは、未来の当たり前をつくっていくもの。気が付いたら当たり前の感覚になっているものを今提示している。思考も同じ。定着には時間がかかるが、何らかの形で提示していくのが表現の役割の一つ。
・今回の４人の作家は、生活の中に根差した問題を一緒に考えることの出来る方達。この４人を中心に、奈良で場を開く活動している若手の方々を繋ぎながらプロジェクトを進めていく。
・9 月に４人で合宿をして、様々な人に会って場を開く計画を立てる。今年度中にプログラムをスタートし、ならまちセンター改修工事終了後、ならまちセンターをハブとして、色んな作家や活動してきた人や市民が持続的に参加出来る場、学び合いの場をつくっていくのがプログラムの目的。
・ならまちセンターをアートプロジェクトセンターとして、生活の中にこれから当たり前になっていくかもしれないものを少しずつ植え込んでいきたい。

（事務局より説明）
「クリエイション・プログラム」青少年と創る演劇
・プログラムディレクター田上豊氏より、今年度の演目案として、市民が脚本創作に携わる短編集「ならのつれづれ」、田上氏の劇団の過去作品を奈良の言葉で上演する「師走のやぶれかぶれ」等が提案されている。公演は３月予定。

（校長 小山田徹氏より説明）
「ラーニング・プログラム」グリーン・マウンテン・カレッジ
・6 年目になる継続事業。焚火というプリミティブな行為の中で、雑談のように色んな意見交換をする場。毎回テーマを決めてゲストを決定している。今回はベーシックインカムの研究者など、ライフスタイルや働き方をどのように考えるかをテーマとしたいと考えている。

（事務局より説明）
「ラーニング・プログラム」ワークショップ
・新規企画、企画公募型演劇ワークショップは、演劇経験のない学生が気軽に参加できるプログラムとして、ワークショップ内容を公募し、プログラムディレクターの田上氏が選考して開催する。
・0 歳から大人まで参加できるパフォーミングアーツワークショップは、古家優里（ふるいえゆうり）氏による赤ちゃんから幼児を対象とした「ダンス」、この事業では初めて講師をお願いする ごまのはえ氏による「脚本創作」、青少年と創る演劇でも指導をお願いしている福田健二氏による「殺陣（たて）」のワークショップ、以上３つを実施する。

実施主体について

・ならまちワンダリングマネージメントは、奈良市アートプロジェクトでのディレクション経験が豊富な一般社団法人ＣＨＩＳＯＵの後継組織である合同会社ＣＨＩＳＯＵに、青少年と創る演劇運営についてはプログラムディレクターである田上豊氏の創作作品の上演を多数手がける一般社団法人田上パルに、地域コーディネーターは奈良で様々なアートイベントを主催し、地域における芸術普及事業等を推進する一般社団法人はなまるの 3 社を指名したいと考えている。

（事務局より説明）

<u>令和 5 年度事業予算（案）</u>

・市負担金収入 10,200 千円、支出は事業費としてアートハブ・プログラム 3,864 千円、クリエイション・プログラム 3,800 千円、ラーニング・プログラム 725 千円、ホームページの制作など広報事業 1,437 千円、事務管理費 374 千円、合計 10,200 千円を計画。

⇒第 2 号議案、第 3 号議案　承認。

（委員からの意見）

・ワンダリングという言葉に注目するのは面白い。コミュニティーエンゲージメントというか、インクルーシブよりもうちょっと能動的。そういうアートプロジェクトがつぎつぎ生まれるセンターを目指すのは新しさがある。アートプロジェクトセンターの構想をもう少し聞かせて欲しい。

→（小山田氏）奈良の教育関係者などにゆくゆくはネットワークのハブになってもらうことが大事と考える。市民の中で場を開こうとしている人の中にプロジェクトの萌芽が見受けられる。センターは内在している未来のプロジェクトを応援していく場所。毎回プログラムディレクターとして作家が来て、町の人と組んで何かをしていく。日常的に定着していくものはあまり予算をかけない方が良い。そういうふうに広げてみて、私もやりたいという感覚を作っていけたらと考える。作家主義、作品主義ではない形のやり方を設計し定着させたい。その為には地元で生活している人と組んでやる事を増やす。出来上がったものは別にアートではなくても良い。奈良で既におられる方を出来るだけ繋いでいきたい。そういうことをする為に、アートプロジェクトセンターと名付けている。

・センターにアートの専門スタッフを集める場合、アーツコミッションかアーツカウンシルを立ち上げて、そこにある程度安定的なポストとして専門家が来られるようにすることが必要となる。かなりの自治体でそういう方向が広がっている。

・彷徨（さまよ）うということは、一人ひとりが新しい奈良の認知地図を作るということに繋がっていくのかなと思う。情報の中だけではなく、奈良に実際に溶け込んでみることによって、新たに一人ひとりが奈良について認知し、それがその人にとってのアート体験、文化体験として深まっていけば、奈良とより密接にエンゲージメントができるのではないか。面白い事業だと思う。

・奈良市アートプロジェクトが 10 年を迎えるにあたって、アートプロジェクトセンターが出来てそれが常時稼働していくことが時間軸で線としてあり、奈良でいつでもどこかでアートプロジェクトをやっているという状態が地理的に面としてある。もう一つは世代間を超えた繋がり。部活動の地域移行では文化部を地域でどうサポートしていくかが課題だが、そこに例えば青少年演劇の活動で中学・高校の演劇部に積極的に関わることで演劇が盛んとなり、高校生の自前の演劇活動がそこかしこでやっているなどとなれば素晴らしい。アートプロジェクトでやっていることを面で広げたり、線で繋げることで定着していくと良いなと思う。中学・高校の演劇がすごく盛んというのが奈良の文化活動の顔だとなると、あまりお金をかけずとも将来に繋がり、そういう繋げ方を 10 周年に向けて考えていければ良いのではないか。

・市立高校などでは現在 ArtsSTEM（アーツステム）教育を実践。社会や地域の課題の解決をどう組み立てていくのかなどの思考にはアートの力が必要と考える。学力だけでなく、非認知能力を育むことをしっかりやっていくことに力を入れている。子ども達に体験させるということは非常に大切なこと。

・未来をつくる子ども達に参加してもらうのは良いこと。年配者はアート自体に入りにくい面もあるので、広報での認知度を高め、大人も子どもも一緒に参加出来る場所が沢山出来るとアートプロジェクトセンターの中に取り込めるのではないか。

→（小山田氏）子ども達が参加している場所に大人が入ると、大人の方が学びが深い。学び直しと言われるが、資格や単位が取れるなどではなく、楽しみながら気が付くと何となく豊かな気分になっている、学びがある、というのが理想なのではないか。

街中で若者がやっている様々な事々は、実は見守っている大人がいて、両者が繋がりやすく、更にその繋がりが目に見える形になってきたら、若者も年配者も一緒にやっている感覚がもっと出て来る。年配者の参加も大いに歓迎する。

4　閉会